

エリザベス・フライの傳

エリザベス、フライの傳 (英國の慈善家)

美人にして富あり、社會に在りては、高き位置を有すると共に、よく貧者を救ひ、罪人を導き、北はスコットランドの極端より、南は佛蘭西の邊に及ぶ迄、福音を傳へて倦ざりしは、實に此のエリザベス、フライ女史なり、凡そ眞實の心を有するものは幸福なり、其れ其人の光なればなり、女史は眞實を以て、其生涯を送りたる人なりき。

女史は一千七百八拾年五月廿一日、英國のノルウヰツチに生る。女史は倫敦の豪商ジョン、グルネーの第三女あり、母ミツセス、グルネーは、パークレース、クラブ、ユリーの後にして、美麗にして才智ある一婦人あり、其居所は常に學者、文人の集合する所なりき。エリザベスは殆ど母を神の如くに信し、幼な心にて、母が臥床に就き給

生涯の事

出生地

女史の母

少女の幼少の時代

ふの時は、その傍に來り眠り居らるゝ母の姿を見て、茲は死去せられしにわらずやなせと、心細さに之を揺り起さんとし、尙覺め給はざる時は、泫然として泣き悲しみける事なせあり、又母上は元來強健の方にあらざりしかば、晝間と雖も往々臥床に入りて休息せらるゝことありしが、其時には、女史は大に氣づかい側に至りて、呼吸せられ居るや、否を伺ふと屢々なりき。

女史母は國對する述

母曾て曰はく「吾が愛兒フライは、曾て怒を發したる事なく、眞實にして愛情ありき」と、フライ後年筆を執り懷を述べて曰はく、「我が母はいなく我を愛し給ひ、時々我を伴ひて古風なる花園に散歩し給ひけるが、吾に語り給ふに、彼のアダム、イブが樂園より放逐せられたりし事を以てせられたり、其は往年の事なりしが、今猶昨今の如くに思はる、我れ思ふに、其二人の追放せられたる樂園は、吾家の花園の如きものなるべしと想像

女史と花

しき、其花園は常に我母之を整理し給ひ、又我を誘ひて花木を植うるを樂みとなし給ひき、其花は春に至りて競ひ綻び、紅白相交りて笑ふ様、其觀いふべからず、我れ遂に植物學者となるの機會あらざりしかと、時ありて山野に徜徉ひ、旅行の途に上りなせして、花に接する時なせ歡喜胸に滿ち、愉快の情に堪へざるものありき」と。

居宅の美

其家宅アルハム、ホールは、美觀を極め、鬱々たる森林の中に立ち、ウエナム川其傍に流れ、家の南方には廣き庭ありて、大木處々に兀立し、野生の花草其下に羅列せり、居宅の景斯の如く、莊麗なりしかば、美術家時々來りて撰寫しけりとぞ。

母の世を去る時女史十二歳

此の幸福なる家庭にも、病魔の手は時々襲ひ入りて、エリザベスが十二歳の時、ミツセス、グルネー(母)は病の床に臥し、幾くならずして黃泉の客となりしが、二歳の兒を最幼者として、子女十一人を殘し去れり、母の死

女史の性

は時々追想せられて、エリザベスが終生悲嘆の種となりき。
 女史は幼時神経質にして、何事にも感じ易かりき。暗黒を恐れて、燈火なき室に獨坐すること能はず、海水に浴するを恐れて、海岸に近づく事を厭ひたり。斯の如き、女史の性質は、皆其幼年時代に於ける一種の妄想より其神経組織を害せられたる結果なるべし。女史は彼の剛強なる小兒の有せるが如き性を缺けるを感じて、こは幼兒のとき恐怖の甚しきに保らず、強いて暗室に獨坐せしめられ、又は強いて海水に浴せしめられたる如きよりして、益々其度を増したるによるなるべしといへり。其故人に嫁せし後も、小兒を教育するには常に之を導く方に勉め、強いて其意思を根底より破壊せんとは試みざりき。是れ適當の教育法にして、基督の教示と合する所なり。されば、女史が監獄事業に於ても、出來得る丈強制的の事を避け、親切と温和とを以て之を導きしかば、却て良結果を奏

女史の子
女教育法

女史事業

容姿と華

乗馬に妙

路上に所
感を通ぶ

天性華美
を好む

しけり。

エリザベス今は妙齡の一婦人となりけるが、舉止優にして姿勢正しく、品格自然に具はり、毛髮順かに麗顔花の如く、才識他に秀でたり。事を執る敏捷にして言行輕快に、且乗馬に長じたりき。家族は皆「クエカー」宗派なりしが、灰色の衣服は着せずして、常に深紅の衣を着けしかば、殊に一段の光彩を添へて、容姿并ぶものなかりき。
 女史は凡ての會合に於て人の注目する處となり、又常に尊敬を受けたりき。女史會である雜誌に其所感を通べて曰はく、「我れ人の瑕疵を指摘するが如き批評家たらざらんことを望む。かゝる事は陋劣の至なり。我は決して斯かる人たらざらん、されど往々斯かる悪性に感染して、次第に善美の良性を毀損することあるを思ふ毎に、心密かに悚然たり。予は又天性華美を好むの傾向あることを覺知す。予今十七歳に及べり、若し

十七歳の時説教を
動感す大に

一段の善行美事を積まざるば、予が名は永く苦の下に埋れて、其光明は損せられ、祈禱の代りに吭咀出でん、女史十七歳の時、米國人ウヰリアム、サツエリーと云へる人、説教の爲めに英國に來るあり、女史は己が姉妹七人と共に、サツエリーの説教を聽かんが爲に出で行けり、エリザベス美靴を穿ちて最前方にありけるが、其説教の進行すると共に、女史は非常に感動し、或時は涕泣嗚咽せり、此説教の感化に由りて、女史の思想は一變して、デイスト教者より熱心なる信神者となり、説教者は女史の爲に下りて神託を授けけるに似たり。

其翌日彼サツエリーはエリザベスの家宅なるアールヘム、ホトルに來りて朝飯を共にせりとぞ、後日エルザベスの娘等母の事を記せる文に曰はく、「母君は此俗世界の凡ての遊戯快樂を愛好したまひしかば、此の日よりして斯かる卑陋なる逸樂の甚趣味なき事を感じ給ひし」と、女史

母等母の
事を知る

説教の影

倫教に赴

公共の類
樂遊戯を

舞踏を練
習す

も亦曰はく、「吾れ拾七歳の頃、一度説教を聞きて感激せしより、爾來晝夜の別なく、又疾病健康の時に係はらず、覺めたる時も寢にある時にも、如何に心を盡しなば、吾が神によく仕へ得べきやと、感せざるはなかり」と、久しからずして、女史は倫敦に赴けり、其は萬事によき經驗を得、又自己の嗜好を満たさんとてなり、されど、倫敦に於けるの觀察は女史の心に満たざるもの多く、諸種の觀樂遊戯の場にも、多くは自ら望むことを制したりき、そは諸々の惡徳に染まんことを恐れたればなり、斯の如き惡風多き場所に立寄らん事は、よしや吾身は汚されずとも、他人に惡を勧むると等しと思惟したればなり。

女史は亦舞踏を練習しけり、されど其は身体の健康を助くる上に必要なりと感じたればなり、女史以爲らく、人生の快樂と稱せらるゝ諸種の遊逸は凡て之を抛つべし、かくて吾人の精神は物に煩はざるゝことな

快樂にける女史の著目點

貧困なる兒女を教育せんが爲に學校を設立す

女史生涯の座右銘

くて、愈々高尚の位置に立ち至るべきなりと、之れに依て、女史が常に其快樂を物質的以外に注ぎしことを推知すべきなり。

是より先き女史は、近隣の病疾者、貧困者を見舞ふことを常としけるが、遂に決意して貧困者の兒女の爲に、一學校を建設するに至れり。初めは一兒童の來りて教を享くるに過ぎざりしが、漸もあらずして七十人の多きに至れり。女史は天性善美の質に富み、且つ愛情深かりけるが、長ずるに及びて益々良性を發揮するに至れり。

曾て其生涯を律せんが爲に、自誠録六ヶ條を定めたり。

第一。時間を徒費せざること。されど毎日業務の餘暇に於きて精神を慰めん爲、少許の休息を取るは此限りにあらず、唯常に勞を取りて倦まざらん事を期すべし。

第二。少許たりとも、真理に悖る勿れ。

第三。人に賞賛すべき點、數多あるに係らず、強いて其人の瑕瑾を指摘せんことを勉むべからず。

慈愛の話は之を爲すといふのみならず、吾も亦之に感ずべし。

第四。何人に對しても性急ある勿れ、不親切なる勿れ。

第五。必要以外の奢侈に耽ること勿れ。

第六。注意深く萬事を處置すべし、正直の事は之を遂行すべし、此場合に神の力を以て唯一の援助と頼み、有らん限の力を以て突進するにあり。

女史は斯かる研鑽の結果、自然に寶玉の美飾を抛ちて、質樸なる衣服を着するに至れり。遂には、クエーカー宗派の衣を着して以爲らく、斯の如くならざれば以て善事を遂行し難しと、初めの程は、女史の行狀、家人に悦ばれざりしを、後に女史を信じ、女史を愛し、女史の世界的榮光を

身邊の善事に熱注す

結婚を申
込さる

十一人の
兒を有す

結婚は女
史の大事
業に傾な
り

家庭に於
ける女史

喜ぶものは、必しも女史が家人のみにあらず、二十歳の頃、倫敦の豪
商、チャロセフ、フライより結婚の申込あり、初めの程は、若し結婚せんか、其
の慈善事業は家事の爲に阻害せられ、精神上の健康害せらるべしと思
惟しければ、時機尙早しとて躊躇せしも、再三の懇請に由りて、遂には肯
諾するに至れり。

斯くて、女史の爲には、幸福なる生活來り、女史は其後十一人の小兒を有
するに至れり、普通の婦人ならば、かゝる中に在りて、尙公共事業に盡す
の暇なかるべし、されど女史は家事の爲に毫も其志を屈することなく、
益々進んで當初の企畫に熱注するに至れり、且つ此結婚は他日女史が
爲せし大事業に、幾多の便益を與へたり。

女史の舅姑は至つて質素に、且つ眞情を以て女史を遇し、其義妹は殊に
女史に親近せり、廣大にして清淨なる居室は、ロンドンのセント、マルド。

路上にて
家路に付
て感なき
迷ふ

境遇に由
ての諸感

女史一家
の移轉
父の死亡
と一家の
變遷

レゾ、コートに定められ、英米人の訪問引きも切らず。

女史は富裕の身を以て、且つ家族を愛するの心に富めるに係らず、曾て
或雑誌に記すらく、「我れは八年前に結婚せしが、我が信仰と忍耐とを試
みらるべき、種々の事件生じ、吾が欲する所は、吾が行くべき所と、稍々齟
齬するに至れり、乃ち、吾れは教會事業の爲に、充分盡力せんとの希望な
りしも、家事に意を注がざるべからざる境遇に至りしかば、甚不便を感
せざるを得ざりき、されどかゝる困難の爲に挫折すべきにあらず、吾は
却つて種々の理想を憶起せり、我は何なりや、力は何處に潜伏すべきや、
我は何に由りて世に輝くべきや、等の諸感、此境遇に由りて生じ來れり。
云々」と、其後十一年を経てフライの一家は、ブラシエツトと云へる所に
移轉せり、此十一年の間は一家に於ても、亦様々の變遷ありたりき、即ち
父なる人は死亡せられ、姉妹の一人はトーマス、フラー、ウエル、パックスト

ンと云へる人に嫁せり、女史亦「ソサイチー、フン、フレンド」の専任者となれり。

斯くてフライも、亦其家庭の教育に注意至らざるなく、外部に向つても、亦基督教の事業に就きて、種々従事すべき機会を求めて盡力せり。女史又曰はく、「大衆の中に立ちて演説等することは、甚だ容易ならぬ事なり、吾れ故にかゝる時は、愛と力とに頼るより外、他に道なき事を感じるなり」と、女史は其言の如く、常に愛と力とに由りて事に當り、又深く聖書を愛讀せしが爲め、一段の勇氣を得たり。其説教は常に王侯をも感せしめ、罪人をも悔い改めしむる力ありき。

女史の近隣には破壊に傾ける貧家ありて、老人と其妹住居せり。昔は富榮の人なりしも、種々の不幸に家産を傾け、今は唯、鬼賣りなどしてその日を送れり。其妹は貧の爲め自然に内氣となり、憂鬱に偏し、悲哀の中に

基督教感
化力

隣家の貧
女を感化
す

又移轉地
に於て貧
民學校を
興す

初對面の
兒童能く
女史に近
づく

貧民に救
與せん爲
に倉庫を
造つ

貧民某箇
の街を巡
視す

打ち伏しぬ。されどフライの感化は、彼等をも光明に導けり。フライ其老人に其の空屋に於て學校を興すべき意なきやを問ひしが、老人快よく承諾しければ、直ちに學校を興す事となり、七十人の貧家の兒女を集め得たりき。女史の朋友いひけらく、「女史は兒童に接すること、最も温順なりき。而して其程やかなる容貌、柔和なる音聲は、曾て一たびも見馴れざる兒童と雖も、容易に近づき馴るゝに至れり」と。女史三十一歳に及びて貧民に救與せん爲に、金巾及フランネル等の貯藏所を建立せり。其中には襤褸屑を以て満たせる部屋もあり、又嚴冬に於ては、善質の石鹼等を備へたる部屋を設けなどせり。女史は時々其愛女を伴ひて「アイルランド」を見舞ひ、或は壊屋の中に入り、汚穢なる街路を通じて貧民の状態を觀、以て慈善事業を研究せり。若し憐れなる婦人の死に接し、病苦になやめる兒童等を見ては、熱き同情を寄せて彼等を慰めけり。

女史公會
に力を致す

女史の主
義

神は貴女
に幸せん

耶蘇の訓
言

女史も初めの程は家事を思ひて、公會に力を致すことを躊躇したりしかど、遂には熱心に従事するに至れり、或時は公會の爲外出して、二週間も家門に入らざりし事ありと云ふ。されど女史の不在と雖も、家内の幸福は變はることなければ、女史も心を安んじて、公共事業に竭すことを得たりき。女史はかくて家に歸らざる事も厭々なりしかど、決して家事を忘却するが如き事なく、其従僕等に接するにも、公平なる愛情を以てし、或る時従僕病みし事ありしが、女史傍らにありて看護に従事し、其死に及ぶ迄、親切を盡したれば、従僕其恩を感謝し、將さに冥せんとするに當りて、「神は貴女に幸せん」と叫びきとぞ。

女史曾て曰はく、婢僕も同じく人なり、之を遇するに、何ぞ懸隔あるべけんや、教神のふる如く、「己が欲する所は、又人に與へよ」と、されば、女史は王侯貴族と同坐するも、其従僕と對するも、其心常に同一なりき、以爲らく「吾人

女史の眼
中人の眼
に同様の
価値あり

又々移轉
す

當時に於
けるニエ
のゲイ
の地位

人間の生活は種々にして、取るべき道異なりと雖も、吾人は皆一樣に神より靈魂を付せられたり、されば其精神に貴賤あるなく、又其の到るべき所は同一なり。此の考へたるや、吾人を大なる同情と、大なる愛情に導くにありとぞ。

三十三歳の冬は、ロンドンに移轉したるが、女史は愈々其希望せる監獄改良の大事業に着手するに至れり、之れが第一着手として、ニユー・ゲイト牢獄より始めたり、當時罪人の此の牢屋にある状態は實に慘烈を極めたり、老幼婦女同一牢屋に雜居し、罪の多少によりて區別することなく、又何等の職業に従事するとなくて、糞糞を糞ひ、塵埃の中に坐し、其眠る者に枕を與ふることなく、木切を以て代用せられたり、罵詈の聲飛び廻るの状、泣き叫ぶもの、淫行を極むるもの、互に喧争するもの、擾々として見るに堪へず、壁は子女の室を別たす鐵鎖柵の儘を以て、室内に井

女史此の
監獄を見
る

獄内ある
罪人の面
前に於て
沈黙す

入牢中の
兒童の爲
に學校を
設立す

列せしめたり。

初めフライ及二三の友、此の牢屋を見舞はんとせしとき、監督者出で來りて曰はく、獄内は盜難の憂あれば、時計、財囊等凡て他所に置いて見物せらるべしと、されど女史等少しも恐るゝ氣色なくして見舞たりと、而して再度此牢獄を見舞ひし時は、女史等は罪人等の許に進みて、耶蘇の降天して罪人を救はんとしたることを説明し、馬太傳の第十章目を讀みさかせけるが、或女問ひて曰はく、「耶蘇とは何人ぞや、何人の出でて罪深き吾等を救はんとしたるぞ」と。

獄中にある小兒の多くは、裸体にして食物惡しく、空氣の流通不充分にして、刺さへ、運動不足なるを以て、其顔色蒼白、身軀衰弱せり。女史は此の狀態を見て、慈善の情禁し難くやあむけん、遂に、其兒童の爲に、學校を建設せんと言ひ聞かせしが、居合せたるもの皆涙に咽びて感謝せりとぞ。

支配者は
獄中の婦
人な以て
せり

此學校の
状況

此學校に
對する女
史の考察

後其學校設置され支配者には、牢中の一婦人メーリ、コンナーを以て充てたり。此婦人は時計を盗み取りたる罪にて入牢せしが、かゝる新らしき重大なる責任を有するに至り、其性一變し、其後決して、牢獄の規則等を犯す様の事なかりし。此婦人はかくて十五ヶ月の後、其罪を赦されたるが、幾何もなく肺病の爲、死去したりと、なん、學校設けられて二十五歳以下の方、皆入學を許可せられたりしが、其席は悉く半裸体の婦人を以て満たされたり、而して其座せんとするや、互に前席を争ひ、雜沓喧嘩を極めけり。女史は又是等の罪人に、夫々職業を授けんと主張せしが、時人は一種の妄想として曰はく、「彼等をして職業に就かしむとも、其物品は直ちに破壊せられ、其或者は直ちに盜取せられんのみ」と、されど女史は深く信する者あるが如く、罪人改良の爲めに十二人よりなれる會を組織せり、其の目的は罪人の衣服を備ふること、罪人に職業を授くること、罪人

兒女等の
其高

を教育すること等なり。女史は彼等に聖書の智識を授けん爲に盡力し、又秩序正肅勤勉ならしめんとし、牢中にありては、從順平和なるべく、牢を出でて、其敬虔の心深からしめん事を希望せり。遂には此等の罪人の勤勞に由りて、靴下其他罪人の需要品を製し得ることを案出せしかば、是が爲に室を設けて、其が執行に着手せり。而して、其勤勞に由り得たる金銀は、各婦人及其兒女に給與せられぬ。十ヶ月の間に、彼等は織物二萬餘を製し、其一ヶ月間に製する所の靴下は、六十對乃至一百對に及びたりき。又勤勞の餘暇を以て、一日二度は、聖書を讀ましむる事となし、善行を爲したるものには賞與を給せられたり。

一少女
を受く

或日の事なりき少女の一人は、其善行の賞として衣服を與へられたり。其少女は女史の前に進み來りて曰はく、「吾れ若し後來善事を爲さば、罪を寛恕せられん」と。女史以爲らく斯の如くば、「吾は彼に聖書を與ふ

裁判官より
恐ろし

べかりしに」と、失望したる有様なりき。之れ他にあらず、女史は聖書を讀得るに至らしめ、以て罪を悔ひ改めしむる事を希望とすればなり。一婦人と雖も、曾て、女史の爲に罰せられたるものはなかりき。之れ女史の理想とする教育法なり。皆曰はく「女史の前に出るは、裁判官の前に出るよりも恐るべきなり」と。女史曾て罪人がトランプに戯るゝことを諷めたりしが、忽にして多くのトランプは、火中に投せられたりと、其徳の盛なる想ふべし。

ニューゲ
ートの牢
屋に改
大に改
りて人
の賛嘆
博くせ
り
名士女
史の門
を叩く

ニューゲートの牢屋は、遂に女史の力によりて秩序整ひ、且、平和に静まり、一種の觀覽場となるまでに、諸人の賛嘆を博せり。或は政治家又は貴族、或は市會議員又は外國旅行者を始め、貴女、僧侶或は曾て女史と説を同ふせざりし説教師迄、女史が改革上の遺跡を見、又其説をきかん爲に集合するに及べり。

貴族院に於て
議院に於て
議院に於て
議院に於て

英國女王
陛下御付
けらるる
御事

斯事業の
の賜もの
あり

刑法の如
きは一種
のトメニ
等し

女史の希望とする事業も、着々歩につきたるが、監獄改革上の方法及事業の企畫等に就き、方案を請求し來れる書簡は處々より送り越され、衆議院に於ても又女史が考案をきかんと爲に、議員集り來りて傾聴せり。女史は其日貴族院に於ても、監獄事業に就て喋々演說せり。かくして、エリザベス、フライの名、益々天下に輝き、英國女王ウヰクトリア女王陛下も亦拜謁を仰せ付けられ、人々は其説を聞くに熱注し、新聞紙又筆を極めて女史を稱賛せり。女史雜誌上に述べて曰はく、「斯かる事業は皆神の爲し賜ふ所にして、吾人が驚嘆に堪へざる所あり。若し吾等が爲す事業の幸に成功して、社會の稱賛を得るあらば、吾等須らく謙讓の心を以て神に感謝すべきなり」と。フライは悲惨の状を見る毎に、苦辛一方ならざりき、刑法の如き之を正義に比すれば一種の「鳥羽書」に等しいへり。

男女罪人多き中には、一婦人の一弗二十五仙の反物を盗みたりとて、斷頭臺に上れるあり。又他の婦人にて其子の餓死を助けん爲め、他人の物を盗みて、頭を刎られたるありて、僅少の罪科の爲め、死刑に處せらるゝものニユーゲートには少からざりき。

一千八百十八年の頃、チヨード、クリクサンクと云へる人、贋造紙幣運用の罪に由りて、死刑に處せられたる人の状を見て、其悲惨なる光景に胸うたれ、八人の男子と三人の女が斷頭場より垂れ懸れる繪を畫き、其繪の縁邊に書して「吾れは英國の銀行支配者及銀行員に誓ふ、そは、容易に摸造し得られざる紙幣を發行せば、かゝる罪人を出さざるに至らん」と。彼又其繪に命名して、摸すへからざる紙幣と稱せり。然るに、此繪は直ちに世人の感ずる所となり、其繪の陳列せられたる店前には、人の山を築きたり。又人の之を購ばんとする者頗る多く、チヨードは夜を徹して

摸すべ
らざる紙
幣

法律なる法

其望みに應せり。其他グルネー及ツネルベルフリース等の如き債、皆熱心に之を論じて曰はく、「苟くも殺人者にあらざる限りは、之を乱りに死刑に處すべからず」と言てハリエツト、スケルトンと云へる女、其戀愛せる情郎の爲に賈造紙幣を通用して、死刑に處せられたるが、彼女心底より悪人にあらざりしかば、當時の人皆彼が死刑に處せらるゝ事を聞きて、之を悲み嘆き、同情の涙を灑がざるはなかりき。フライも亦之をききて大に慨き、重き鐵扉もて閉されたる、晝も猶薄暗き獄室に彼を訪ひ、又グローセスタ公と共に、諸所の銀行監督者及シーモンド卿を訪問して、彼女の爲に辯護せしが、更に感動する色もなく、憐れなるハリエツトは、遂に死刑の宣告を受けけり。されど世人は女史の志を賞讃し、シーモンド卿等を詰責するの様とあり、遂に此等の苛酷なる法律も改正せらるる幸運に至れり。

苛酷なる法律の改むるに女史の力あり

女史死刑を厭ふ

女史再死刑を施行する者なきを述ぶ

女史は心中より死刑を厭ひて、極力之に反對し、言て曰はく、「死刑の如きは、決して罪人を善良に導き、其心を感化せしむる所以にあらず、却つて罪人の心を凝固せしめ、遂に一度誤つて死刑に當る罪を犯すことあらんか、その罪人は一層最大の犯罪を企て、何事をも恐れざるに至るべし。死罪の制度は、未だ犯罪者の數を減せしむるに足らず、否、日に月に増加するを以ても、省みる處あるべきなり」と。又曰はく、「世界が今日より一層進歩をなし、又は殺人の直接原因ともなるべき、死刑施行を目撃せしむる事などなからんには、絞殺の刑は自然減少して、遂に廢する事を得るに至べし。若又已むなくて、社會安寧維持の爲、其生命を絶たざるべからずば、クロ、フرائمの如き藥材を以て、温和なる方法の下に之を施行すべきなり」と。女史は又罪人をして、單獨に幽閉することは、却て其心を亂し、道徳的思念を薄弱ならしむる基なりと論せり。

女史の悲

女史又かの罪人が掩ひもあき、二輪の荷馬車にてニウー、サウス、ウエル
 スに送らるゝ途上、顔を隠して衆人の中に嘲笑せられ、其より船に載せら
 るゝ有様を見て、最も厭ふべき寒風なりと思ひ、自ら政府に請ひて、彼女
 と共に彼等を四輪馬車に入れて船に行かしめ、船に入るや一同甲板上
 に整列せしめて、將さに流罪に處せられんとする彼等と共に、熱心に神
 に祈禱し、然る後温順に彼等に別れを告げて、歸ることゝせり。此の如く、
 女史が有難き行爲に向つては、如何なる大罪人も感激せざらんや、事實
 彼等は熱涙を湛へて其恩を拜謝せりとぞ。

マリーチン
女史を讀

キヤプナン、マリーチン氏曾て、女史を賛讃して曰く、「此の美なる此の勸誘
 方に富める消淨天の如き婦人に對して、誰か讚美せざる者あらんや、女
 史の容顏に接しては、何人も其の愛の力にうたれ、女史の言説を聞けば、
 何人も其の至誠に感動す、嗚呼、女史こそ、眞に耶蘇の愛の美を感得した

スコット
イランド及
インダラ
の牢獄を
讀して一
書著す

るものなり」と。

女史其後ち其兄弟あるデヨセフと共に、スコットランド及英蘭の北方
 なる、罪人の有様を見めぐりて、債務者等が不潔なる牢屋の中に閉ぢ込
 められ、或は牢屋の壁に繋かれ、或は床の鐵に繋がるゝあれば、又は手足
 を縛せられて、藁の上に呻吟する婦人等の悲惨なるに感慨し、歸り來り
 て一書を著はし、其慘狀を世に訴へしが、之れ又遂に英國の輿論を喚起
 するに至れり。

四十歳未
滿に其名
既に世界
に轟く

女史齡未だ四十に達せざれども、其名は既に世界に知れ渡り、露西亞の官
 吏よりも女皇の命にて書を女史に致し、首府セント、ピーター、スブルグに
 於ける癩癩病院及病者取扱に關して、女史の説を聞かんと求めしかば、
 女史も亦書を送りて之に應じけり、其他和蘭の大都會アムステルダム
 及佛國の首都パリ、其他所々より書を送りて、女史の説を聞かん事を求

再英國の諸所を巡回したる後、女子監獄改良會を發起して、罪人が入牢中盡す所あるのみならず、其出獄の後も之に職業を授け、以て良民に立ち歸らしめんことを期せり。

其不幸はフライ及一族凡べてに及ぼせり。されば、フライの一家は、ブラシュエットに於ける家屋を賣却して、ミルドレット、コートに移轉するに至れり。されど女史の富豪なる兄弟及女史の子息等の力にて、忽ち回復し幸福又故の如し。

女史は又英國海岸衛兵所の存在せる、或る所に圖書館を設立せんとて奔走せり。而して其資金の一部は寄附金により、一部は政府の力を借り、此等の圖書館には、二萬五千餘部の書籍を蒐集することを得たりしかば、之又世人の感謝を受くるに至れり。

一千八百三十七年女史は、又其朋友と共に、佛都パリに趣き、其他の牢獄につき精細なる調査を爲せり。彼國の政治家ギゾー氏を初めとし、其地の有志家皆彼女を招きて好遇せり。英國に於ても王及皇后亦女史に接して女史の事業に就き熱心對話せらるゝものありたりき。

女史は又曾て千二百人の罪人を收容せる、ニスマスの牢獄を見舞ひしが、武装せる兵卒五人は、女史及び女史が一行を護衛せんが爲に來れり。されど、女史之を辞し、自ら牢屋の中に入れり。先づ二人の罪人が桎梏の下に呻吟するを見て、汝等が若し善行を爲さんと誓ふならば、吾れは汝等の爲に寛宥の請求を爲さんものとて、其罪人を縛より解きて善行

の爲に寛宥の請求を爲さんものとて、其罪人を縛より解きて善行

の爲に寛宥の請求を爲さんものとて、其罪人を縛より解きて善行

を勤め、又毎夕罪人の爲に祈禱しき、女史牢獄内に數多の罪人を呼集め、神の榮光を謝して諄々説教せしが、一人として泣哭せざるはなかりきと、而して女史が此の事業の好果は著しくして長き後まで影響を與へたりとぞ。

獨逸に旅行す

今回は獨逸に旅行を企てしが、王はブラツセルに女史を迎へ、デンマー國にては皇帝皇后共に、駕を任けて女史を見舞はれたり、其時女史は兩陛下の間に坐を占めて談話を試みしとぞ、又榮譽の事ならずや、獨逸國首都に赴きし時も、貴き皇族の方々皆女史を姉妹の如くに遇せられ、女史が跪いて祈禱を捧ぐるや、皆女史の周圍を擁して之を受けられたりとぞ、而して新しき感化院此地に設立せられ、其組織計畫皆女史の建言に基づき、頗る完全を極めたりしかば、皇族諸家皆女史を徳とせり、千八百四十二年プロシヤ王、ウエールス若王の保管人と共に英國に來

其待遇

女史祈禱の際

感化院の組織計畫
女史の建言による

プロシヤ王英國に遊ばせるに
東宮に女史の居宅を訪問す

家族の有様

其子の遺言

られしときも、女史は此王と共に女史の居宅に會食するを得たりしが、女史は多くの子息孫女をも其席に待せしむることを得たり、一家の繁榮れもうべきなり。

フライの家族はかく多かる中に、女史は其子息ウキリアムを愛せしが、ウキリアムは二子を遺して逝去せり、又其愛兒五才のエリザベス死する時、母に向ひて曰はく、「母よ、兒は己より一層他人を愛し、他人より一層母上を愛す、されど、兒は母君より一層神を愛す、願はくは、母君も亦我より一層神を愛し玉はんことを」と、而して此言は、非常に女史を感動せしめたり、女史曰はく、「吾は吾が愛する良人と共に、同情及同感の涙を以て此語をきけり、吾れ此言を回想する毎に、慟哭に堪へざるものありと雖、も、吾れも良人も神の爲に、互に喜び互に勵み居れり」と。

女史の
時を
知る

女史の
時を
知る
に
て
其
時
を
知
る

女史の
時を
知る

女史の
時を
知る

女史の
時を
知る

女史の
時を
知る

女史の
時を
知る

の影の谷を通じ行かんとするものなり、恐らくは一層の艱難を以て来る
ことあらん、されど神は我傍にあり、苦痛何ぞ恐るゝに足らん」と。

千八百四十五年十月十三日は、女史が最後の日にてありき、九時と覺し
き頃、其兒女の一人、母の傍に來りて聖書を開き、以て塞亞書第四十三章の
第十三節及第十四節を讀めり。

「そは我(エホバ)……なんぢの神はなんぢの右手をととりて汝はいふ、懼
るゝなかれ我なんぢを助けん」と。

「またエホバ宣給ふ、なんぢ虫に等しきヤコブよ、イスラエルの人よ、
おそるゝなかれ、我れなんぢをたすけん、汝をわがあふ者は、イスラエ
ルの聖者なり」と。

女史悠然として、

「嗚呼願はくは神よ、汝の下僕を繋り給へ」と言ひ終るや最後の呼吸

を遂げけり。

女史はパーキングなる埋葬地、即ち彼の愛兒エリザベスの永く眠りに
つける處に葬られたり、而していとも静肅なる儀式を以て、女史の弟チ
ロセフ、デヨン、グルネーは嚴かなる祈禱を捧げたり。

かくて高尚なる生活を送りたる、エリザベス、フライ女史は此世を去れ
り、彼は初より終迄、よく慈善事業に盡力せり、曾て椅子によりかゝりて、
海岸にありしときは、其通行人に、又曾て旅館に投じたるときは、其婢僕
等に、至る所、在る所、聖書を讀み、神の恵を授けたり、かくて、遠近親疎の
別なく、女史に接するを光榮とし、病に苦み、死に類する者も、女史が説
教を聞き、其心を安んじ、一家不和に葬せる者も、女史に接し、其教へを
きかば、凡て其愛の力に融和せざるはなかりき。

魯西亞王アレキサンダー、曾て女史を評して曰く、「女史は其時代に於て

女史の家
庭に於け
る注意す
べき一事

女史の性
實

る魁偉の一なり』と宣ひしも偶然にあらす。其一子にして永く存命せるもの、曾て女史の家庭に於ける、注意すべき一事を述べて曰はく、『我が母は決して怒り給ふことなく、又決して荒々しき言葉だになかりき。其語は常に吾家の法律にして、實に其は又愛に出でたる法律なりき』と。女史は其性質怯懦にして、身体健康ならざりしも、其生活は甚だ大膽なる生活にして、其死は基督教信徒として愧ざる死なりき。女史がなしたる慈善事業の偉大にして、高潔なる何者か又之に比すべき、吾人はかゝる尊敬すべき心靈の再び降下して、吾人が社會を救済せんことの一、日も速かならんことを望むものなり。

泰西名婦傳畢

泰西名婦傳奥附

定價金參拾錢

明治三十四年三月二十六日印刷
明治三十四年三月三十日發行

編者 永山盛良

東京市神田區表神保町四番地

發行者 紀太武一郎

同市同區同町二番地

印刷者 藤澤外吉

同市同區仲稜樂町四番地

印刷所 日本印刷株式會社

複製
不許

發行所

東京市神田區
表神保町四番地

勢陽堂書房

農學士永山盛良先生編

泰西名婦傳

全頁像寫具銅版摺
一 定價 金 參 拾 錢
冊 郵稅四錢郵券代用一割増

西洋婦人の行徑は吾等東洋人をして奇怪の感を抱かしむるもの往々にして之れあり然れども彼等が社界の表面に及ばず感化に至りては深窓成人的東洋婦人が精探細索以て他山の石とすべし其の價値あるもの亦乏しきにあらず此編收録する所ステール女史の力抄たる一婦人の身にして能く歐洲を席捲したる余翁をして一敵國の思をなさしめたる泰西の左右し遂に男爵夫人の榮位に昇りたるが如き女流美術家の泰斗たるボンヒュール女史赤十字業の開山たるナイチンゲール女史其他孰れも各自特殊の天才を發揮し吾人をして一讀三嘆の思ひあらしめざるはなし若し夫れ行徑の如何に経餘曲折の致に富み又傳奇的逸話の饒かなるかは請ふ一本を座右にして之を知れ

- 目録
- ローザ、ボンヒュール(佛蘭西の畫家) ナイチンゲール(タリミア戦争の女傑)
 - バーデット、クック男爵夫人(英の慈善家) ステアール夫人(佛蘭西の小説家)
 - メイワット、ライオン(米の女流教育家) アリア、ミューエル(米の女流科學家)
 - マーガレット、ブルレル、ワッソングー(米の雜誌記者) ユリザベス、フライ(英の慈善家)

海門著

三島通庸

通庸肖像、自筆の歌大久保利通公書簡外に銅版四枚、菊版定價四十錢、郵稅六錢、郵券代用一割増

天下の物議を顧ず、東北に緯の如き砥の如き通路を開鑿す、保安條例を施行して、千百の壯士を一朝にして都門の外に退け、然も猶世人の知らざる、北海に其理想境を起さんと計り、皇道を五州に弘めんと策し、我教育界の改善を企て、自ら大臣を指名して一内閣の組織を試みたる、明治の舞臺に、最興味ある、最多事の活劇を演せし、三島通庸が事跡は、悉く收て此卷の中に在り、秀抜の思想、壯快の筆を以て、此奇傑の眞面目を盡して餘す所なし、附録として、豊宮興味ある逸事詠歌を載せ増々此偉人の風采を紙上に躍如たらしむ

教授理學士高等師範學校佐藤傳藏先生撰定

日本物産標本

中城之部

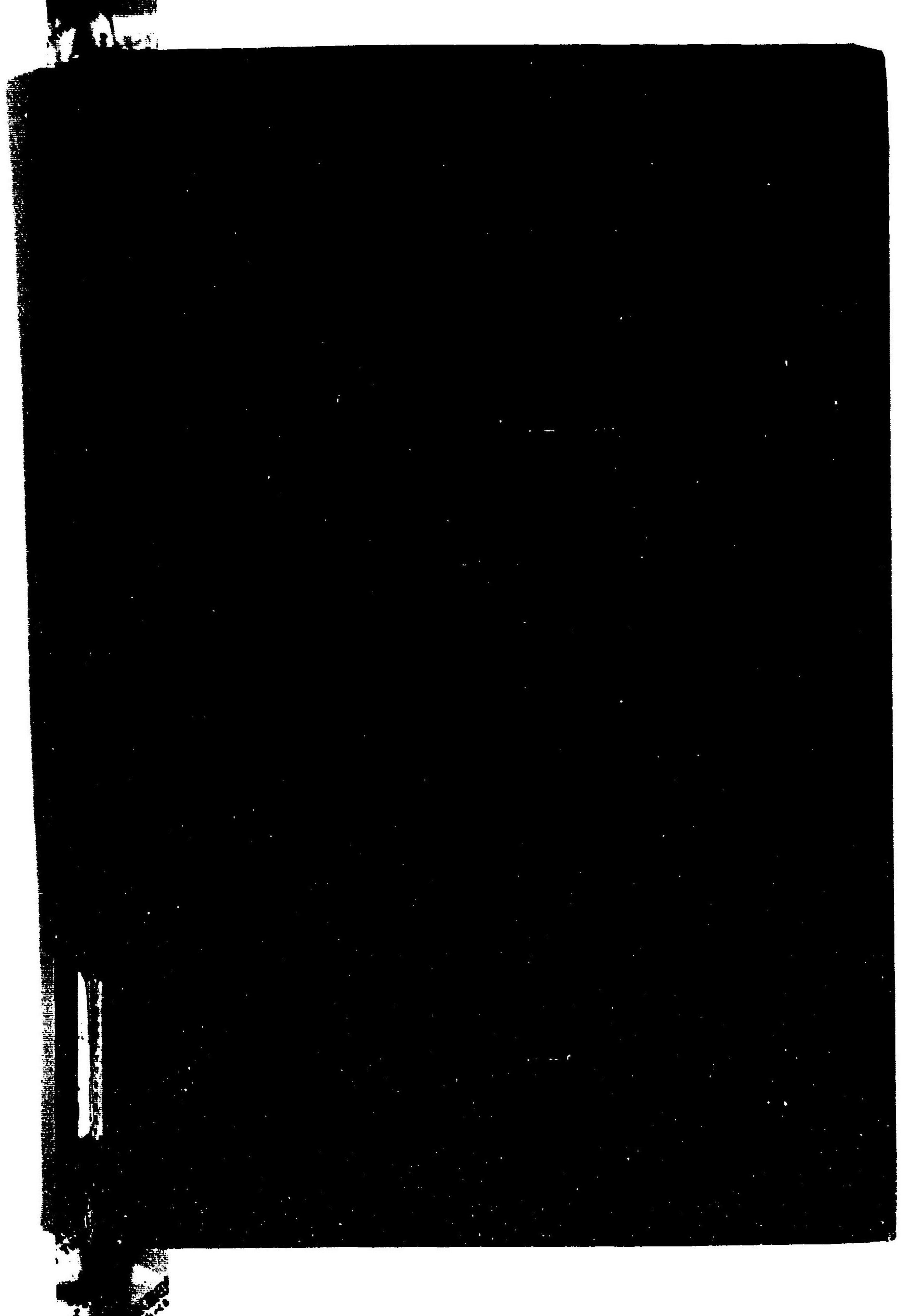
定價 甲五十五種 金拾貳圓
乙四十種 金九圓

運賃 荷造 詳細説明書 附
入 費 要 附

地理教授研究上最も困難を感ずるは物産説明理解にあり其物産説明理解に困しむは其實物を得るに容易ならざらんが爲めなり依て弊店今般日本各地物産を發賣せんとするに當り其の撰定を佐藤傳藏先生に乞ひ今般新に改正せられたる文部省指定教授細目の順序に依り各地の自然物と製造品とを問はず苟も小學及び中等教育の學校に於て物産として教ゆべき者は漏らさず蒐集して附するに詳細なる説明を以てす依て一度此標本に接する者は自ら各生産地を跋渉し各製造所を巡歴する想あらん小學及び中等教育の諸學校及自ら地理を研究せんと欲する人は必ず一組を座右に備へられんことを望む希く、詳細御申込みんことを

●第一關東地方之部 (東京府、埼玉縣、神奈川縣、千葉縣、茨城縣、群馬縣、栃木縣)





003975-000-5

88-105

泰西名婦伝

永山 盛良/編

M34

ACE-0259



